

時事評論
現代を
読む
2

森本あんり

(国際基督教大学教授)

スポーツの書
—政治家はスポーツがお好き

オリンピックの招致合戦が盛んである。正式には今年一〇月に決定されることだが、現時点では東京を含む四都市が候補に残っている。先日、IOC評価委員会が現地視察のために東京を訪れた。招致委員会の会長である石原慎太郎都知事は、ご一行に最大限の接待を尽くした後で、記者団にこう語った。「オリンピックの東京開催は、都民・国民への大きなプレゼントになる」。

わたしは、オリンピックで活躍する選手たちには大いに声援を送るつもりである。勝利を目指してひたすら精進する彼らは、ストイックで宗教的ですからあり、ときに精神の深みを垣間見せてくれる。だが、それが政治家の旗振りや号令で進むとなると、やや複雑である。「国民へのプレゼント」？——石原都知事殿、プレゼントというものは、自腹を切ってあげるものです。わたしが払う税金をご自分のポケット

トマネーと勘違いしていませんか。政治家はスポーツがお好きである。いや正確には、スポーツの華々しい大会や祭典がお好きである。その招致や開催に指導力を發揮してみせ、晴れ舞台に立って大仰な挨拶をすることは、政治家にとっては大いに意義のあることなのだろう。だがそこには、別の思惑も働いているように思われる。

「スポーツの書」をご存じだろうか。題名からすると、最近のブームに乗ったお手軽健康読本のようなのだが、そうではない。一六一年にイギリスで発布された法律である。ピューリタンの蔓延に手を焼いていたジェイムズ一世は、とある村で彼の忠実なる臣民がピューリタンの教えに従って聖日を遵守しているのをご覧になった。ピューリタンは、聖日は礼拝後も静かに過ごして、娯楽やスポーツをしない。そこで王は、さっそく国中におふれを出した。日曜日は、

ふだん身を粉にして朝から晩まで働いている庶民が「リフレッシュするためのレクリエーション」を楽しむ大切な機会である。それを否定するピューリタンは不埒である。庶民は日曜日には大いにスポーツを行うべし。

つまりスポーツは、庶民の日常生活に鬱積する不満を発散させる機会であり、絶好のガス抜き弁なのである。それを禁じると、人々の不満が昂じて国情が不安定になり、反乱が起きかねない。だから政治家はスポーツを奨励するのである。国を挙げてメダルの色や数を競うとき、国民は日頃の憂さを忘れて熱狂する。こんなすてきな目の逸らし方はない。

もちろん、今日のオリンピックで活躍する選手たちは、そんな政治の思惑に加担しているというわけではない。否応なしに日の丸を背負わされて、称賛されたり非難されたりすることだけでも、彼

らは十分困惑しているに違いない。だが、ここまで巨大化し商業化してしまったスポーツ・イベントは、政治とカネの力なしには動かない。「スポーツの書」は、父王の後を継いだチャールズ一世により再発布された。ピューリタン迫害をさらに強めていたチャールズは、それを全教会の説教壇から読むように命じ、従わない牧師を解任したという。——さて、本誌を読んでいる日本の牧師のみなさん、そんなことを命じられたらどうしますか。これはどこか遠い国の昔の話ではありません。「日の丸」君が代が義務化され、従わない教職員は「職務命令違反」として処分される国、そして裁判所もそれをおかしとは思わない国、の話です。

え？ チャールズはその後どうなったかって？ ご存じのくせに、そこまで言わせるんですか？ 国民の反発を食らい、ピューリタン革命で断頭台の露と消えましたとさ。